キジと地ドリの飼養管理

青森県種鶏場
谷内光雄

庭で放し飼いされた白チャボ

『光陰矢のごとし』という言葉があるが昭和四十四年トリ年も早や十二月、トリがたつように過ぎ去ろうとしている。この年を振りかえってみると総合農政という言葉と同時に必ずといってもよい程、畜産云々といわれ通しの年でもあったが、トリ年の産業養鶏は、マレック病による育成率の低下、ニューカッスル病、卵価問題等多難な面もあったが、大型養鶏の飛躍的な発展に向かって邁進した年ともいえる。

一方、このように産業養鶏が華やかな反面、古くから飼育されてきた地ドリや、キジの増殖は全くその陰にかくれた感があり、ともすれば一般的に忘れさられようとしているように思われるが、今日までの養鶏産業発展の礎となり、また将来飛躍的な発展をとげるための役割りを果たさなければならない地ドリ、そして山林を害虫から守るキジの愛玩用としての地ドリ、ハンティングのためのキジと、その重要性がますます高まりつつあることを忘れてはならないと思う。

すなわち、その一例としてジンプール（遺伝因子保存）のための地ドリについてふれてみると、現在の産業養鶏を支えているニワトリは、もとをただすと野鶏から出発し、一クラッチの卵（抱卵できる範囲の十二～十三個）しか生まなかったものが今日年間三百六十五個をも産卵するまでになり、またブロイラー産業の主役を果たす白色コーニッシュが十週齢前後で二㌔㌘に達する発育を示すなど地ドリの能力からみれば手のとどかない程の向上がみられ、地ドリとは別世界にある感を呈しているが、しかし、これら今日の実用鶏はいずれも野鶏から出発し数多くの突然変異と、交雑そして自然トウタ、ときには人為トウタの繰り返しと、地域的閉鎖によって地ドリとして固定され保存されたもののなかから、そのいくつかの長所を人為的に組合わせられて成立したものである。

最も手近な例として挙げなければならないものにブロイラーの代表品種としての白色コーニッシュがある。これは英国における地ドリの一種で、闘鶏として保存されたダークコーニッシュ（暗色コーニッシュ）で産業的に全く忘れられてあったものを一千九百四十年頃米国の一ブリダー、バントレス氏によって胸肉の充実性の利用に注目され改良に着手されて以来今日の白色コーニッシュが出来上がり、世界の養鶏界に新しいブロイラー産業を推進せしめる原動力としての役割を果たすに至ったのである。

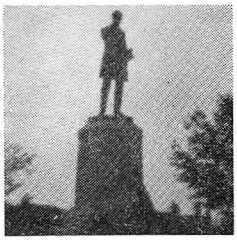
このように産業的価値がないからといって地ドリとしてのダークコーニッシュが維持されていなかったら今日のブロイラー産業はみられなかったろうし、また将来産卵鶏におけるミゼット（小型鶏）時代をつくるための地ドリの働きを考えたとき遺伝因子保存としての地ドリの重要性を再認識し

牧草と園芸　十二月号　目次

頁

□ピーマン・なすの品種とその使いわけ　表二
□かぼちゃの作型と品種の使いわけ　表三
■キジと地ドリの飼育管理……谷内　光雄　一
■富山県の飼料作物品種と栽培の要点……堀田　良　五
□関東以西における家畜かぶ収穫……薄　巌　八
■草地および畑地の施肥管理の要点……山内　正視　一〇
■台湾のアスパラガス栽培……山本　茂雄　一四
□学会報告　一六

〈表紙写真〉オタワの落日



カナダの首府オタワの国会議事堂周辺には多くの銅像があり優雅ななかに庶民の憩がある。

なければならない。

キジにおいても全国土の大半を占める山林を害虫から保護する省力的一方法として大いに増殖したいものであり、地ドリ、キジの増殖のための飼養管理についてふれてみたい。

◎ 地ドリのふ化について

地ドリのひなをかえすには、母鶏ふ化が一般的におこなわれる。これは卵の数が少ないために高価なふ卵器を購入することは経済的でないことを挙げなければならないが、幸い地ドリそのものが就巣性をもっており、しかもひなを育てるにも手数が省け、育雛器を必要としないなど便利な面が多いからである。

母鶏ふ化をする場合に考慮しなければならないことは抱卵を目的とした母鶏は必ず平面飼育をすることであって、最近用いられるケージや、バタリーで飼育すると例え地ドリといえども就巣しないものが多い。このためにせっかく抱卵させ得るだけの種卵を得てもふ化することが出来ない場合が多い。

種卵は産卵されてから二週間位まで貯蔵出来るが十二度(C)前後の貯卵温度が理想的である。特に多量の種卵を得たいときは種卵を生産する親と、抱卵育雛を目的とした母鶏を分けておくことが必要であって、ふ化育雛用の母鶏は、必ずしも品種の特性を具備していることを必要とせず強健で就巣性さえもっているならば雑種鶏で充分その役割りを果たす。また目的とする時期に就巣性を人為的に起こさせる場合はプロラクチンを用いることも出来る。

抱卵させる巣箱は、直接土間におき、底をとり、巣箱が半分位土中に埋没される位にして、箱の中にはムシロを敷きその上に種卵をならべておくと土中から湿気が供給され、ふ化率がよくなる。巣箱をおく場所は、犬猫などの外敵の侵入しない所を選び、しかも明る過ぎたり、人の出入りの多いところをさけるようにつとめないと離巣する場合が多い。また母鶏は抱卵中といえども一日に一回排糞と飼料摂取のために巣箱を離れるから近くにエサと水を常に準備することを忘れてはならない。特に高価な種卵は、ふ化育雛の経験のある母鶏を用いることが必要である。順調に進むと二十一日でひなが発生する。

人工ふ化をするときは、必要に応じたふ卵器を購入するが一般に小型ふ卵器は温度湿度ともに外界の影響を受けやすいから日に三〜五回は必ず検温、検湿を忘れてはならない。特に湿度不足にならないようにつとめなければならない。入卵後一週間前後に検卵して無精卵発育中止卵を除去する。

◎ 地ドリの育雛育成

母鶏ふ化されたひなをその母鶏とともに同居させ、母鶏に育てさせる場合は、特別の育雛器をも必要とせず、また管理も容易で母鶏そのものがほとんど育ててくれる便利さはあるが、母鶏の利用回数をふやしたい場合、種卵の採取量を増加する場合、また人工ふ化された場合等は人工育雛をしなければならない。この場合給温の可能な育雛器を用いるが、小羽数の場合は、木箱を利用して簡単に作成出来るし、また、古い電気コタツなども利用出来るが、特に育雛の場合育雛器の給温部からの火災に注意しなければならない。

育雛器は、水洗をした上に薬品（パンゾール一〇〇倍）で十分消毒した後乾燥しておく、ひなのふ化する一日前から温度調節をし、給温度の周囲で三十八度(C)位になるようにしてひなのふ化するのを待つ。ひなを入れると同時に育雛器の一部に古新聞紙等を敷きその上に市販の完全配合飼料を粉のまま少量散布しておくと、ひなは餌をたべることをすぐにおぼえる。地ドリの育雛初期の一週間だけは比較的湿度があった方がよいが一週間を過ぎると排糞量が多くなり却って過湿になるから、出来るだけ乾燥につとめなければならない。廃温は早春で三週間、夏秋で二週間位で充分である。この廃温後羽数が多い場合は密集による害、床面の過湿によるコクシジュームの発生等がみられるから床面の乾燥につとめなければならない。

また、地ドリは外貌（羽毛、羽装、体形）を重視するものがあるから成長が進むにしたがって出来るだけ広い場所で飼育し、運動を十分させ、体軀の充実とバランスを保つことにつとめるとともに外傷、羽毛の損傷、汚染をさけるようにする。

長尾鶏の飼育箱

なお、シャモのような闘鶏の育成については、三十日令頃から雌雄を分飼し、雄は一羽飼いにして将来闘争に使用する場合は、脚と首筋の強化を計るために飛びあがってようやくとどく高さにスルメをつるし、トレーニングをさせるのも一つの方法である。

◎ 地ドリの成鳥管理

長尾鶏の雄のように、尾羽の汚染、損傷をさけなければならない場合は、トリ自体が自由に動き回らないような狭い箱でしかも一本のとまり木にとまられ主尾羽を巻きあげて飼育する。しかし長尾鶏以外の地ドリは平面舎飼育を主とするが、鶏体の汚染防止と、病気の発生防止のために、敷ワラ等は常に乾燥しておかなければならない、このため敷料としてはモミガラ、鋸屑を十分入れるようにする。

種卵をとる場合は、平飼いでは雄一羽に五〜十羽程度の雌を配しておくが、巣箱の卵は毎日集めて種卵の破損と汚染を防止す

る。特に巣箱に卵をためると種ドリの就巣性を促す結果になるから注意しなければならない。

なお、親ドリをケージに収容する場合は、一般ニワトリの場合と全く同様の管理をするが、小型の地ドリの場合はエサ箱の深さ、飲水器を設置する高さには十分注意しなければならない。ケージ飼育の場合人工授精によって種卵を採取する。人工授精は簡単で器具は精液管とペピット（あるいはニワトリ用注入器）を揃えるだけで出来るから近くの養鶏試験場、種鶏場からその技術を学んでおくようにする。

◎ 地ドリのエサについて

従来、地ドリ類は放飼され、自由に農家の庭先等で農産物の残滓、昆虫類、雑草の実等を食し、それにとき折、穀類をマキ餌として与えられる程度であった。したがって栄養も季節によって変化し、産卵も春季だけにとどまるなど種卵の確保が比較的少なかったのが実態である。しかし、ニワトリ用の完全配合飼料を給与すると性成熟も早まり、産卵個数も増加する。特にケージに収容した場合は就巣回数が大きく減少し、しかもその就巣期間が短くなる。したがって、この上さらに点灯すると年中種卵を採取することが出来る。

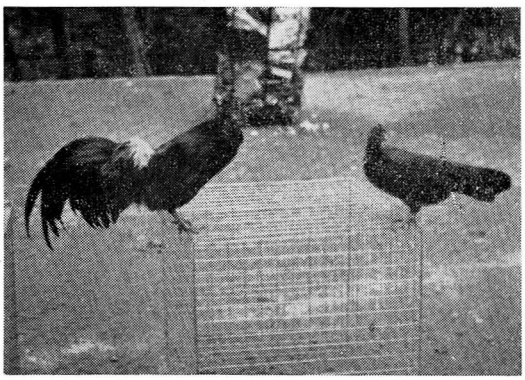
地ドリのエサは、育雛、育成、成鳥を問わずニワトリ用配合飼料を用いる。特に種卵採取期間中及び育雛育成中は、ビタミン類を多給する意味で青葉とか蛹粕（二〜三%）またはビタミン剤を添加することにつとめるならば十分である。

◎ 地ドリの衛生について

地ドリは、古くから地域的に独立したところにおいて作出飼育され、しかも小羽数飼育であったために比較的病気が少なかったが、しかし、最近では愛好者間による交流、そして養鶏産業の発展にともなって、全国各地の養鶏密度が高まり病気の侵入、感染の機会が多くなっているので病気に対する対策については十分注意が払われなければならない。

地ドリに比較的多い病気の一つには、ひな白痢症がある、すなわちひなを育てるとき、よく白色下痢をしたり、糞づまりを起こしたり、ふ化率が悪かったりするが、この病気は親から卵を通じて感染する場合が多いから、地ドリの購入するときまたは、中大雛時代に必ず白痢検査をしておかなければならない。また、鶏痘、ニューカッスル病に対する予防としてのワクチン接種も実施しなければならない。これらの問題は近くの家畜保健衛生所に依頼して指導を受けなければならない。内部寄生虫としては回虫症が主なものであるからニワトリ用のピペラジン剤を二〜三ヵ月に一回は投与する。外部寄生虫としてはシラミの駆除はBHC粉剤を用い、ワクモはマラソン剤の散布、トリサシダニにはサンマコー粉剤を用いる。地ドリに多い疥癬症は疥癬虫が脚の脛鱗の間から侵入して増殖し痂皮をつくり、地ドリの発育と美観を損じるものであるから常に鶏舎を清潔にし、もし発生した場合は患部に石油と硫黄華を混じたものを塗擦する。白癬症も地ドリに多い病気で冠、肉髯、顔に白い粉末をふりかけたようになるから水銀軟膏を塗擦する。

特に地ドリの種卵をふ化するためにふ化場に依頼しても断わられるのは地ドリに対する衛生対策が不完全である場合が多いからであって、地ドリの飼育者はこの点について大いに反省しなければならない。



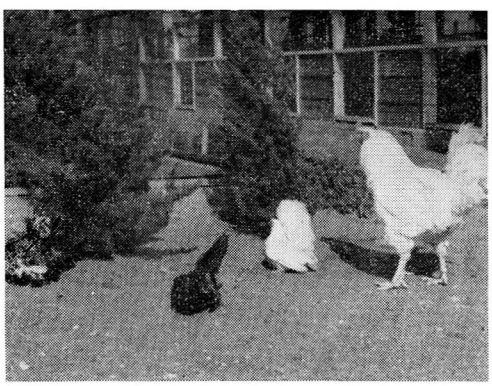
岐阜地ドリ（古くは郡上地ドリといった）

◎ キジのふ化

キジの卵をふ化するには、地ドリと同様に母鶏ふ化と人工ふ化法があるが、舎内飼され、産卵を強制されているキジのメスはほとんど抱卵しない。若し就巣してもキジそのものに抱卵させることは種卵生産上からも不利であるから、地ドリ、またはその雑種に抱卵させる。なかでもチャボ類を用いると成績がよい。キジのふ化も地ドリの項で述べたような方法によるが、特に多量の湿気を要求するから抱卵巣箱の周囲に散水または注水することが必要である。キジのふ卵日数は入卵後二十三日である。

キジのひなは、ふ化と同時に走り回り、しかも足が速く遠くまで移動し、迷い子になる場合が多いから、抱卵巣箱を置く場所の周囲を一〜二センチ位の金網をめぐらしておくことが必要である。

キジの人工ふ卵器も最近では市販されているからこれを用いると便利である。しかし小型であるために外界の影響を受けて、温度、湿度の変化が非常に多いから検温と湿度調整には十分注意しなければならない。入卵後十日目頃に暗い場所で検卵すると無精卵、発育卵が判明するから除去し、十八日目または十九日目頃に卵座から発生座に発育卵を移動してふ化させるが、この



右より白色コーニッシュ，白チャボ，黒チャボ，碁石チャボ

場合金網でつくったバスケットに入れてふ化させないと、飛び回り、水盤に落ちこみ溺死したり、ファンでたたかれて死ぬ場合があるから注意しなければならない。

◎ キジの育雛育成

キジの育雛育成中特に注意しなければならないのは逃亡である。したがって、母鶏育雛の場合は、母鶏とともに入る大きな育雛箱をつくり、これを二つに区切り一方を母鶏室とし他方をひなの運動場兼飼料給与室とする。この両室の境はひなだけ移動出来るようにし、育雛器全体を金網で被ってひなが逃亡しないようにつとめる。二〜三週間もすると保温を必要としないから隔離して育雛する。

中、大雛となったキジは活発な運動と激しい闘争をするようになるから広い運動場を与え、草生、灌木を植栽して日蔭をつくりエサ箱に雨水が入らない程度の屋根があれば十分である。

◎ 親キジの管理

成長したキジの外貌検査と白痢検査を実施し、これに合格したものを種ドリとして残す。親キジの飼育舎は一羽の雄に三〜五羽の雌を配したものを一群単位とし、雨や雪をさける程度の小屋を一群に一坪と運動場一〜二坪程度与えるようにする。

二群以上飼育するときは、他の群のキジがおたがいに見えないように工夫する、地ドリや、ニワトリの飼育のように連続鶏舎にして金網越しに隣のキジが見えると、オスキジの発情が早い群に他の群のオスキジの発情がおさえられ、ますます発情が遅れて、無精卵を多くする結果になる場合が多い。したがって連続鶏舎で飼育する場合は隣接する面を土間から三尺以上板張りにするとかムシロなどを張り付けておくことが必要である。

また、『キジのひと飛び』といって急に飛びあがり運動場に張りつけた天井の金網に頭を打って外傷をうけたときには致命傷にさえなることが頻ぱんにおこるから天井の金網は二重張りとして、その間隔を三十センチ位にして、しかも下に張る金網は、ゆるく弾力性を与え頭を打っても金網そのものが上下に波打って、キジの頭が強く打撲しないようにする。すなわち上部の金網は逃亡防止であり外敵からキジを守るものである反面下部に張ったものは飛びあがりによる打撲防止である。

産卵は四月下旬頃から暖かさを増し、土壌に湿気を帯びる頃から産卵を開始する。舎内に飼育されたキジは、室内、運動場の別なくどこでも産卵するからとき折見回り早めに集卵しないと踏みつけられ破損する場合が多い。

キジのオスは四月中旬頃から発情をみせる頃になると顔と頭が鮮紅色を呈してくる。このころから、そろそろメスも産卵を始め、エサ、管理ともによく出来ていると七月下旬まで産卵を継続し、一羽当たり一ヵ月に十個から二十個位の種卵を得ることが出来る。しかし、種卵としてのふ化率、良雛率ともに前半に産卵したもの程高く、六月中頃より暑気とともに低下するから、産卵開始と同時に種卵を採取し、ふ化するようにつとめることが大切である。貯卵は二週間以内にとどめ長期の貯卵はふ化率の低下の原因になる。

◎ キジのエサ

キジのエサは良質の蛋白とビタミン類の給与につとめなければならない、幸い最近ではキジ専用の配合飼料が市販されているので、これを使用すると便利である。また、ニワトリの配合飼料を用いる場合は、蛋白質の多い幼雛用を用い、さらにビタミンB_2剤の添加及び蛹粕を三〜五%位混合すると、ひなの脚弱、指曲りを防止出来る。

種用親ドリの場合もキジ専用の配合飼料を用いるが、もしニワトリ用の配合飼料を用いる場合はビタミンB_2、ビタミンB_{12}、及び蛹粕を添加するとふ化率と良雛率がよくなる。さらに育成、親ドリを問わず軟い青葉を与えることも忘れてはならない。

◎ キジの衛生管理

一般に、野生に近い動物は、病気に強いといわれるが、それには二つの面があり、一つは確かに野生という全く保護されない厳しい自然に打ち勝つ性質が長い間につくられた面であり、他の一つは広く美しい自然における生活なるが故に病気に汚染され難い面があったことは事実であるが、人間がこれを飼育するということは、この二つの面が全く逆の環境に変わり、却って病気に対する抵抗性を失なう面も少なくないので衛生管理には十分注意しなければならない。

キジのひなを飼育して最初に出るのは脚弱と、指曲りである、これについてはビタミンB_2の多給の必要性はエサの項で述べたとおりである。次で鶏痘が発生する。これにおかされると眼瞼、クチバシ、脚に痂皮（カサブタ）をつくり、さらに口腔内にジフテリー偽膜をつくり、呼吸困難になり死亡するから鶏痘ワクチンの接種は二〜五週齢の間に二回接しておくことが必要である。

回虫症の被害も比較的多いものであるからピペラジン剤の投与も中大雛時に入ったら一ヵ月〜二ヵ月に一回は実施しなければならない。その他ニューカッスルの予防注射、伝染病、内外寄生虫共にニワトリに準ずる。

◎ 放鳥時の注意点

育成されたキジは、山林に放鳥する仕事は県庁の林務課で実施しているが、この場合必ず外貌検査を実施し雑種になっているものは放鳥対象から除外し野生状態で雑種化されるのをさけなければならない。また衛生管理に十分注意を払い健康なものだけを放鳥し、山野における病気の蔓延防止につとめることを忘れてはならない。

以上、キジと地ドリの飼養管理にふれたが、増殖技術そのものも大切であるが同時に衛生面については特に注意されることを望みたい。